

審査の結果の要旨

氏名 中村 恵佑

日本において大学入試は、学校教育のみならず社会的にも大きな影響を有する、重要な教育政策の一つである。その中でも、大学入学希望者の多くが一斉に受験する共通試験の在り方は、大学入試の要ともいえるべき制度であり、その時々において注目を浴びてきた。

共通試験に関する従来の研究では、教育心理学、教科教育学、また教育社会学などの分野で、共通試験のテスト問題やその政策・制度の「内容」を評価し、より合理的な試験内容や実施体制を探究してきた。一方で、その政策・制度がどのように形成・決定されてきたかという政策過程にはこれまであまり着目されてこなかったが、政治学などでは、政策過程の態様が政策転換のタイミングや政策の安定性に大きな影響を与えうることが指摘されている。本論文は、従来の研究で多かった共通試験の政策「内容」ではなく、その政策「過程」に着目することで、一定の安定性が求められる共通試験において、なぜ、どのように政策転換が起こるのか（あるいは起こらないのか）という重要な問いを解明しようとするものである。

本論文は、序章、終章を含め全2部、7章からなる。序章では、本研究の背景と目的、及び大学入試研究や教育学研究への意義を述べている。第Ⅰ部「本研究の設計」では先行研究や分析枠組みの検討を行っている。第1章では、共通試験に関する従来の研究動向を整理してその課題を述べると同時に、本研究での解決の方向性を示している。第2章では、本論文の理論的な枠組みとして、政治学において政策の安定性を説明するために用いられる拒否権プレイヤー論に着目して説明を加えている。拒否権プレイヤーとは、ある政策を現状から変更するために同意を得ることが必要な個人または集団のアクターを指す。その数やプレイヤー間の選好の距離、プレイヤー内部の結束力が政策の安定性を説明しうることを述べ、政策過程分析においてこの枠組みを用いることの有効性や課題を考察している。第3章では、共通試験の政策形成・決定過程に関わるアクターとその行動や政策過程を規定する制度について検討を行っている。

第Ⅱ部「事例分析」では、これまで実施されてきた共通試験の比較事例分析を行っている。第4章では、短期間で改革が行われた共通一次試験と、比較的長期にわたり実施された大学入試センター試験の政策形成・決定過程の比較事例分析を、第5章では、大学入試センター試験からの政策転換の結果創設された高校生のための学びの基礎診断と、大学入学共通テストの政策形成・決定過程の比較事例分析をそれぞれ行っている。分析の結果、本論文の仮説として示した、拒否権プレイヤーの数、プレイヤー間の選好の距離、及びプレイヤー内部の結束力の変化が、各共通試験の政策転換に実際に影響を与えていることを指摘している。最後の終章では、本論文の知見と得られた結論を提示し、その知見が大学入試研究や教育学研究に有する含意、及び今後の課題について言及している。

本論文は、これまで試験のテスト問題や、制度・政策の内容に着目して分析することが多かった大学入試共通試験に関して、その政策形成・決定過程に注目した点が大きな特徴である。それにより、共通試験制度の安定性の高低や政策転換の有無の違いがなぜ生じるのかという、学術的にも実践的にも意義が大きな問いについて、教育行政学の視点から新たな知見を見出すことに成功している。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。